

示子適 子適に示す

我初學詩日 我れ初めて詩を学びし日

但欲工藻繪 但だ藻繪に工みならんと欲す

中年始少悟 中年始めて少しく悟り

漸若窺宏大 漸く宏天を窺えるが若し

怪奇亦間出 怪奇亦た間出し

如石漱湍瀨 石の湍瀨に漱ぐが如し

數仞李杜牆 數仞李杜の牆

常恨缺領會 常に恨む領會を欠きしを

元白纔倚門 元白 纔かに門に倚り

溫李眞自郤 溫李 眞に自郤なり

正令筆扛鼎 正だ筆をして鼎を扛げしめんも

亦未造三昧 亦た未だ三昧に造らざらん

詩爲六藝一 詩は六芸の一たり

豈用資狡獪 豈に用て狡獪に資せんや

汝果欲學詩 汝果して詩を學ばんと欲せば

工夫在詩外 工夫は詩の外に在り

○嘉元元年(一一〇)秋、故郷での作。八四歳。放翁には「詩を論じた詩」が多いが、本詩は晩年の詩觀を示したものととしてよく引用される。○子適 放翁の末子。このとき三二歳。この前々年子適は父放翁の詩集を編纂している(詩稿卷六九「力辨」自注参照)。

○藻繪 詩文における裝飾的な表現をいう。六朝の文學理論書「文心雕龍」原道篇に見えることば。○宏大 規模の大きさ。○怪奇 奇抜ないまわし。○間出 時々あらわれる。○如石漱湍瀨 湍瀨は早瀬。早瀬のはげしい流れに石が洗われるような、はげしく非凡な表現のたとえ。○數仞 仞は古代の長さの単位。周代の尺度で七尺をいう。○李杜牆 李杜は唐の代表的詩人李白(七〇一―七六二)と杜甫(七一二―七七〇)。ともに放翁が最も尊敬した詩人。牆は塙。數仞……牆は「論語」子張篇に、子貢が先生の孔子の偉大さをたたえて、先生は塙にたとえれば數丈の高さ、門から入ってみてはじめて中に立派な建物のあることに気がつくようなものだ、といったことばにもとづく。○領

會 眞の理解。この一句は李杜があまりに偉大なため十分に理解できぬことをいう。○元白 中唐の詩人元稹(七七九―八三二)と白居易(七七二―八四六)。○纔 やつとのことば。○倚門 門口によりそって立つこと、すなわちまだ本質に迫らず初歩であること。○溫李 晩唐の詩人溫庭筠(八一二―一八七二)と李商隱(八二二―八五五)。○自郤 郤は春秋時代に河南省にあった国の名。呉の国の王子季札が諸国の歌謡を次々と批評して「自郤以下無譽焉——自郤より以下は譽る(批評する)無きなり」といったのにもとづき、後世問題とするにたらぬものを「自郤」という。「左伝」襄公二九年に見える。○正 止と同じ意味に用いた。だ……だけ。晋代の用法。「世說新語」などに見える。○扛 かなえを持ち上げる。「史記」項羽本紀に見えることは人なみはずれて力の強いことをいう。ここでは筆力のたくましさにとえる。○三昧 梵語 samāpatti の音訳で、ものの興義あるいは神髓をいう。○六芸 六經、すなわち孔子が定めたといわれる知識人に必須の六つの教養、あるいはそのための古典的書物、詩・書・礼・楽・易・春秋。○資 材料となる、たねにする。○狡獪 冗談、あそび。六朝時代のことば。自注に「晋人、戯れを謂いて狡獪と爲す、いま閩語(福建の方言)尚お爾り」。この一句は詩をあそびの道具とする傾向への批判。○工夫 ものを行うのに要する力、あるいはその時間。○詩外 詩以外のもの、すなわち生活一般、正しい行動、正しい思想など。

私がはじめて詩を勉強し出したころは、ただ飾った美しさを出すのに上達しようと思っていた。中年になってやっとすこし心に悟り、次第に規模の大きさを手さぐりで求めはじめたように思う。奇抜な表現もたまには使い、それらの詩句にはまるで石が早瀬に洗われるようなはげしいものもあった。

李白と杜甫は數丈の高さの塙にかこまれて中がうかがえぬほど偉大であり、十分に理解できぬことがいつもくやまれる。元(稹)と白(居易)とはやつとその門口に立つていど、温(庭筠)や李(商隱)となるとまったく論ずるにたらぬ。ただ筆力だけが鼎をあげうるほど力強いとしても、とても詩の奥義をきわめるまでにはゆかない。

詩はそもそも古代の六つの教養の一つとされたものだ。それをあそびの道具にしてよいものか。お前もし詩を勉強しようとするのなら、努力を詩以外のところにそそぐべきだ。